

マルクス学位論文における自然哲学の再解釈—エピクロスの感覚主義を中心として—

1. 課題

エピクロスの感覚主義の意義と限界を、マルクス学位論文を素材として考察する。

→近代の科学の認識論について一定の示唆を得る。

2. 背景・意義

近代の科学的認識論：客観と主観を峻別。主観を排除、客観を重視。≡デモクリトスの認識論。

疑問a) 科学における様々な疑義：例)複雑系研究、量子力学など

b) 客観・主観はいずれも人間の主体性の発現。単純な二分法でよいのか。

c) 近年の科学的知識が関わる社会問題における客観・主観の問題。

例)原発の事故・再稼働等に関する見解の違いや賛成・反対：「客観的な正しさ」をめぐる対立か？

客観的認識の深まり、科学的知識の普及→「正しい」答え・合意は得られるのか？

客観的認識：市民より専門家の方が優越。だがそれは正しいか？

マルクス：学位論文でデモクリトスの認識論を批判。対極にあるエピクロスの認識論を高く評価。

→デモクリトスの認識論に代わる認知枠を、マルクス・エピクロスから学び取れるか？

3. 概要説明

学位論文『デモクリトス^aの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異』：

- ・1841年に当時23歳のマルクスが提出した学位論文。
- ・本体紛失。印刷用筆写原稿(マルクス本人の訂正、挿入、補足つき)のみが現存。欠落が多く、完全な形では残っていない^c！
- ・古代ギリシアの原子論者、デモクリトスとエピクロスの自然哲学を、その知識論、認識論の点から比較し、エピクロスを「自己意識の自然学」として高く評価。(マルクス「今までの研究でエピクロスは『デモクリトスの真似をして余計な付け加えをした！』として、評価が低かった。」)
- ・エピクロス派、ストア派、懐疑派の三派を取り上げる、より大きな著書の構想があったようだが^d、実現していない。

^a デモクリトス [前420頃(ソクラテスと同時代)]...レウキッポスとともに、原子論で有名な自然哲学者。かれの理論は、主に伝承記録から知られる。(断片は少ししか残っていない)

^b エピクロス [前341?-270(アリストテレスと同時代)]...快樂主義者として知られる。自己意識の平静(アタラクシア)を目的とする哲学。デモクリトスの原子論を真似しているだけだとして、かれの理論への評価は低かった。一方で、経験主義的な科学への影響も大きかった。

^c レジュメ最終ページに欠落の詳細を掲載。

^d 学位論文序文より(Marx[1841]1968=1975: 189)。

関連資料「エピクロス派、ストア派、および懐疑派の哲学へのノート」：

- ・1838-9年にマルクスによって書かれた7冊のノート。文献からの詳細な抜粋と、それに対するコメント。
- ・内容…エピクロスの思想(エピクロス、ルクレティウス^eから)、プルタルコスへの批判、ギリシア哲学史など多岐。

それぞれの哲学者の認識について：

*原子論で共通。世界のすべては、これ以上分割できない物質としてのアトム(原子)と、空虚により成立。

● デモクリトス：

①主観と客観を区別。客観的知識としての真理を求める。一方で、人間の感覚＝主観的仮象。

「この世界(感覚的知覚の世界—報告者補足)はたしかに主観的な仮象ではあるが、まさにそのことによって原理からきりはなされて、自立的な現実のうちにおかれたままである。しかし、この世界は同時に唯一の実在的な世界であり、そのような世界として価値と意義とをもっている。デモクリトスはそこで経験的な観察へと駆られる。哲学に満足せず、彼は実証的な知識の腕に身を委ねる。」200^f (傍点は原文のまま、下線は報告者による。以下同。)

→感覚とは独立した、経験的・実証的な科学を志向するという矛盾。

「彼が真であると思う知識は無内容である。彼に内容を与える知識は真理性を欠いている。……(中略)……彼は彼の探し求めたものを見いだしはしなかった。」200-1

→真理の発見は原理的には不可能。経験を積み重ねてもこの矛盾は克服できず。

②自然を必然性、決定論で説明。

「感覚的自然を主観的な仮象と考える懐疑家で経験家であるデモクリトスは、感覚的自然を必然性の観点のもとに考察し、事物の客観的現存在を説明し捉えようと努める。」206

「あるひとが渴き、水を飲み、元気になるとする。デモクリトスは、偶然ではなく、渴くことを原因としてあげるであろう。なぜなら、……(中略)……彼は、偶然は、個々のもの場合には、なにもの原因でもないと主張し、他の原因に帰するからである。」204

● エピクロス：

①客観と主観は連続。感覚は客観的現象であり、正しさの基準。

「もし君がいつさいの感覚と争うならば、君は、君が偽であると主張するところの感覚をすら、何に帰着させて偽であると決定するのか、その規準すらもたないことになろう。」主要教説23

例) エイドーラ：事物の表面からはがれて感覚器官に入る粒子。感覚を説明する。

「エイドーラは自然物体の形式であり、それは表面としていわば自然物体からはがれ、これを現象のなかへはこびこむ。事物のこの諸形式はたえず事物から流れでて感官のうちにはいりこみ、まさにそれによって客体を現象させる。」228

^e Titus Lucretius Carus：エピクロス哲学を解説する長編詩「De Rerum Natura」(『物の本質について』)で知られる。

^f マルクス学位論文からの引用(Marx[1841]1968=1975)は数字のみで示す。

→感覚=変動する状態つまり時間。時間と空間の連続性。

「感覚的世界の変化性としての変化性、その変転としての変転という、時間の概念をなすところの現象のこの自己内反省は、その分離された現存在を意識された感性のうちにもっている。人間の感性は、それゆえ、体現された時間であり、感覚世界の・現存する・自己内反省である。」 227

世界は絶えず変化している・変化そのものが普遍的である。それを捉えているのが感覚。

「エイドーラはたえず物体から分離して感官のうちに流入するがゆえに、そして、エイドーラはその感性を、それ自身においてではなく、それ自身の外部に、ひとつの別の自然としてもっており、それゆえ、この分離からたちもどることはないがゆえに、エイドーラは分解し消失する。」 228

認識対象と認識主体の連続。「自然」と「人間の感覚」は直接に関係している。

「自然は、聴くはたらきのなかで自分自身を聴き、嗅ぐはたらきのなかで自分自身を嗅ぎ、視るはたらきのなかで自分自身を視る、そういうわけで、人間の感性は、自然過程がひとつの焦点としてそれのなかで自己を反省し、燃えて現象の光となるところの、媒体である。」 228

②思想は可能性を示す恣意的なもの。偶然性を重視。

例) 原子の偏り運動：必然的法則としての直線落下運動からの偶発的な偏り、逸れ。

—偶然性、自由を表現するもの。

「直線的な道からの偏り [declinatio a recta via] は原子の気ままな決定 [arbitrium] であり、特殊的な実体であり、真の性質である。」 (ノート: 124) §

「ルクレティウスは、正当にも、偏りは運命の掟 [fati foedera] を破ると主張している。そして、彼がこれをただちに意識に適用しているように、原子についてこう言うことができる、偏りはその [原子の] 胸のなかにあつて逆らつてたたかい抵抗することのできるなにものかである、と。」 210

—他の原子との関わり(衝突)である反発(自己意識の原初形態)を説明する。

「もし原子が偏ることをならいとしないならば、原子の反撃も衝突も生じえず、けつして世界はつくられなかつたらう、とルクレティウスは正当にも言っている。なぜなら、原子は、自分自身 [つまり相互] にとつて唯一の客体であり、ただ自分自身にのみ関係することができ、したがつて、空間的に表現すれば、衝突することのできるからであり、……」 212-3

4. 先行研究の検討

①主に1970年代まで：山中隆次(1969)、城塚登(1970)、正木八郎(1972)、黒沢惟昭(1979)など多くの研究。

エピクロスの原子の「偏り」=自己意識・主体性の萌芽段階。

「(偏りの措定によって——報告者)反発運動が、デモクリトスのように、たんに物質の盲目的必然性としてでなく、抽象的個別的自意識の論理構造として、すなわち、もう少し具体的にいえば、個人の主体性を無視するほどに圧倒的な外的世界に抗し、そこからの脱出をはかる、まさにアトム的近代人の構造的矛盾の自然的表現として、把握されるに至つたのである。」 (山中 1969: 82-3)

§ ノートからの引用は(ノート: 頁数)で示す。

「こうしてマルクスは、エピクロスによる偏差(偏りと同義——報告者)の想定は自己意識の立場に立って人間の主体性や自由を保証するためのものであったとし、この偏差が表現している法則は全エピクロス哲学を貫いていると主張している。これから見ても、マルクスがエピクロス哲学を高く評価した理由は、エピクロスが自然の必然性に対して人間の主体性と自由とを保証したこと、彼が直接的存在の立場から離れて自己意識の立場に到達したことにあることは明白である。」(城塚 1970: 59)

それが人間においてどのように実現されるか? →後のマルクスの思想展開への接続。

論点) 天体論(メテオレー、マルクス学位論文最終章)においてエピクロスが示した矛盾。

エピクロス天体論: 他の自然哲学と違い、説明の複数性を保つ必要がある。

感覚と矛盾しない限り、天体についてのどの説明も正しい。

→天体は原子論を体現しているので、説明は一つでよいはず。

なのにわざわざ、説明を複数にする必要があると主張する矛盾。

マルクス: エピクロスは原子を可能性・偶然性において規定したにもかかわらず、

原子論の完成である天体は、自然を必然性に転化。

そこでエピクロスは説明の複数性により必然的決定論に対抗。

「抽象的個別性(エピクロス自身)」と「具体的個別性・普遍性(自立的な自然)」の対立。

「それゆえ、メテオレーの理論のうちには、エピクロスの自然哲学のたましいがあらわれている。個別的な自己意識の平静をやぶるどんなものも永遠ではない、というのである。天体が自己意識の平静を、その自己同等性を乱すのは、それが現存する普遍性だからであり、そのうちで自然が自立的になっているからである。」236

→自己意識の絶対性と自由こそが、エピクロス哲学の原理であり、

その帰結は、原子論そのものの解消。

「エピクロスにあっては、原子論は、すべてのその矛盾をはらみながら、自己意識の自然学として、すなわち、抽象的な個別性の形式のもとで絶対的原理であることを知っているところの自己意識の自然学として、最高の帰結にまで遂行され完成されているが、この帰結は、原子論の解消であり、普遍的なものにたいする意識的な対立である。」

237

この帰結自体は、エピクロス自身のものではなく、明らかにマルクスにより拡張されている。

主な解釈: マルクスの認識は、天体論における対立を乗り越えた認識である。

マルクスはエピクロスの抽象的個別性の立場を批判し、「具体的普遍」の立場に立つ。

「まず、マルクスは自己意識の哲学、とくにエピクロスのそれを高く評価する。それは歴史の発展過程と哲学の関わりにおいて、両者の分裂・対立・矛盾を徹底的に押し進め、尖鋭化させたからであった。だが、マルクスはこのエピクロスの抽象的個別の立場をそのまま認めるものではなかった。その揚棄としてマルクスが提示したのは『具体的普遍』であった。」(黒沢 1979: 59)

具体的普遍を担う主体としてのプロレタリアートの発見につながる。

→エピクロスとマルクスの相違を強調。エピクロスを乗り越えたマルクスを見いだそうとする。

批判：後のマルクス思想展開に収斂しない要素があるのではないか。

マルクス「エピクロスは自分の矛盾に気づいていた」

「(天体論における矛盾でエピクロスは——報告者)彼のさきの諸カテゴリーがここでくずれ、彼の理論の方法が別のものになることを感ずる。彼がこのことを感じ意識的に発言しているということが、彼の体系の最も深い認識であり、最も徹底的な帰結である。」 234

→エピクロス自身も、この矛盾を対象化する視点を持ちえた。

マルクス・エピクロス＝自己意識を、必然・偶然(法則性とそこからの逸脱)の双方を認識する基盤、
必然・偶然を「主体的に」生み出す基盤として把握していたのではないか。

マルクスは、エピクロス自身の理論の展開を延長することで、別の理論になりうるという、エピクロス理論の流動性を示している。

②構造主義：晩期Althusser(1988=2002)など。

「偏り」の意味…目的論に先行する世界の起源の説明、「出会い」。だが—

「しかし、出会いはそれ自体では、なにも創造しないこと、なんの現実も創造しないことを、明確にしておく必要があります。出会いが作り出すのは、原子そのものに現実性を与えることです。原子は偏奇(偏りと同義——報告者)や出会いなしには、一貫性も実在も持たない、抽象的で孤立した要素にすぎません。さて、ひとたび世界が構成されると、その瞬間から、理性・必然性・意味の王国が設立されます。」(Althusser 1988=2002: 54)

→目的論を排除。起源を問うのは観念論。主体性は後付け。

「あるイデオロギーを構成する諸概念が、人間の『自由な意識』を強要して、そうした観念が真であると自由に再認識させるかたちで、個々人に呼びかけるのです。したがって個々人は、現前しているところで『真理』を再認識できるような、つまり、イデオロギーを構成する諸観念における『真理』を再認識できるような、自由な主体としてみずからを構成するように義務づけられることになります。」(Althusser 1988=2002: 105)

→「主体性は作られたもの」という姿勢こそが、本当の唯物論。

実現さるべき人間の自由の起源として「偏り」を捉え、その必然的發展を考える研究「普遍的な弁証法的諸法則をともなった唯物論的一元論」(Althusser 1988=2002: 36)は、目的論・形而上学。

→1970年代までの研究への批判につながる。

批判：この立場は主体性を無意味化し、知的探求者を、世界(哲学の対象)の「外」においている。

＝知的探求者(構造主義者自身を含む)の主体性が対象化されていない。

←→マルクス・エピクロス＝自己意識は、世界から超越したものではなく、哲学の舞台そのもの。

「エピクロスにあっては哲学の原理は、世界と思想とを、思惟されうるものとして、可能的なものとして証示することである。彼の証明、すなわち、それが示され帰着されるところの原理は、ふたたび、それ自身として存在する可能性自身であり、その可能性の自然的な表現が原子であり、その可能性の精神的表現が偶然であり恣意である。」(ノート: 36-7)

構造主義的解釈は、デモクリトスの認識論に親和的。

「私がいいたいのは、唯物論的な世界観や歴史観は、合法則性のなかに、さまざまな事物や自然等を支配する諸法則の認識のなかに、基礎を置いているのだということです。すなわち、必然的で人間から独立した仕方で存在しており、現存するいっさいのものの秩序・位置・機能作用を規定しているような諸関係の認識です。」(Althusser 1988=2002: 140)

構造主義者は、自分を世界の外に置き、人間の感覚を信頼せずに真理を追究しようとする、デモクリトスのように振舞っていないだろうか。

③最近のエコロジー研究：工藤秀明(1997)・John Bellamy Foster(2000=2004)。

人間と自然の関係を考察する重要な概念を学位論文に見いだす。

工藤：自然と人間の関係についてのマルクスの了解…

①自然と人間が一体である、②人間は自然の内部に存在する、③人間は自然の主体性を分有するだがエピクロスは天体論において、人間に対立する自然を否定してしまっている。

エピクロス(人間中心主義)とマルクス(自然に主体性を認める)の自然-人間関係認識の違い。

Foster：マルクスは、非決定論的で唯物論的なエコロジー思想を生涯一貫して持っていた。

マルクスに、自然支配でも自然崇拜でもない自然との関わりの可能性を見いだす。

人間と環境との流動的な相互関係

「マルクス自身はエピクロスから、われわれは自然をわれわれの感覚を通して『過ぎゆく』ものとしてのみ、つまり時間的プロセスにおいてのみ知覚することができるという唯物論的見方を学んだ。したがって、われわれが自然の一部であり、自然を感覚的に認知する限りで、そしてわれわれがこの感覚的認知から抽象する概念に基づいて、『物質の自由運動』は、われわれの認識の一部だということになる。」(Foster 2000=2004: 363)

マルクスのエコロジー思想は、自然科学と社会科学の本質的統一を示している。

「実在論という形式をとって、それは自然科学と社会科学との、物質界・自然界と社会との永続的で緊密な結びつきを要求した。この理由から、マルクスは常に彼の唯物論を『自然史の過程』に属するものと規定していたのである。同時に彼は、社会史の弁証法的・関係的性格と、人間社会が社会的実践を本質としていることを力説した。したがって、唯物論を自然と自然科学・物質科学の領域から分離しようとするいかなる試みも、最初から拒絶したのである。」(Foster 2000=2004: 24)

マルクスがエピクロスに見出したもの…自然からの疎外。

「マルクスにとって、エピクロスは第一の感覚論の哲学者であったが、彼は世界からの人間の疎外を発見した者であり、これに対抗するために、唯物論的自然観に基づく科学(啓蒙)の必要性を発見した者であった。」(Foster 2000=2004: 111)

だがマルクスは、エピクロスの思想は、その観照的性格、抽象性において限界をもっていると認識。

「マルクスによれば、エピクロスは唯物論者でありながら、現実的可能性(必然性をも認識し、したがって限界をもつ)に反対して、偶然性と自由意志とを誇張する抽象的可能性の側についた点で誤っていた。」(Foster 2000=2004: 100)

批判：これらは報告者の見方に近い。学位論文に、後のマルクス思想発展の萌芽だけではなく、人間と自然の関係に関する独自の考察を見いだしている。

エコロジー論＝人間と自然の連続性。だが、それは人間の恣意性(主体性)を制限するものではない。

自然の自立性、自然法則の必然性は、自己意識が生み出したもの。

エコロジー論を本質的に問おうとすれば、自己意識を問うことになるのではないか。

天体論(エピクロスの矛盾)において問題になったのは、そのような自己意識ではなかったか。

④マルクスはエピクロスのとった「形式」に注目：荻原理(2007)

マルクスが対象にしていたのは、エピクロス自身の自己意識であり、それを反映するものとして、マルクスはエピクロス哲学を捉えている。

「エピクロスが『自己意識』の哲学者だというのは、エピクロス派体系の『主観的形式』に着目した場合のはなしである。エピクロス哲学の『内容』としての自己意識論が問題になっているわけではない」(荻原 2007: 6)

「マルクスは、エピクロス自然学のいわば“主人公”である原子を、エピクロス派体系の(あるいはエピクロスの)精神(『自己意識』)をなんらか投影的に表現したものとみなしている。」(荻原 2007: 9)

マルクスはエピクロスの一番の理解者として振舞う。

天体論におけるマルクスの拡大解釈：エピクロス本人が気付かなかったエピクロス哲学の帰結。

「マルクスに言わせれば、エピクロスはじぶんが演じた思考の劇の意味を完全には理解しておらず、それを初めて明確にしたのはじぶんだということになる。『主観的形式』に着目するマルクスの方法は、解釈対象たる哲学者が何をしているのかを、当人が気づいていないこともふくめてすべて暴き出そうとする。」(荻原 2007: 14)

→マルクスのとった方法は、エピクロスの自己欺瞞を見せる冷徹なものである。

批判：非常に示唆的。だがマルクスの取った方法は「冷徹な方法」なのか？

「哲学的歴史記述は、どの体系においても、諸規定それ自身、つまり体系をつらぬく現実的な結晶化を、哲学者たちが自分を知るかぎりにおいて彼らのおこなう証明や、対話における弁明や、叙述から、分離しなければならない。現実的な哲学的な知の黙々と働きつづけるもぐらを、あの諸展開の器でありエネルギーである主体の・多弁的な・外向けの・多様に振舞う・現象論的な意識から、分離しなければならない。この意識の分離にあっては、ほかならぬ意識の統一性はじつは相互的な偽りであることが示されている。」(ノート: 178)

マルクスにとっての「本質的なもの」を取り出さなければならないことは、

可能性や偶然性を特徴とするエピクロス哲学を対象にするからこそ、矛盾に陥る。

エピクロスの自己意識に注目することは、マルクスのような哲学史的問題意識のもとでは、

エピクロス全体(主体性を含めた)を捉え切ることにならない。その限界を、マルクスは自覚。

5. 結論

①主観—客観認識について、学位論文が与える示唆…主観と客観の融合の可能性。

主観と客観を峻別し、認識主体を対象の外に置く近代科学認識は、デモクリトスのであり、限界をもつ。
エピクロスの認識は、単純な「主観主義」ではない。

- ・個人の感覚：個人に帰されるものではなく、現実的關係性の中で成立。
- ・自然認識と社会認識の連続性を見ることができる。

→個人主義は個人の中に閉じ込められているものではなく、共有される手掛かりをもつ。

主観を、個々人の認識に閉じ込められた、説得力のないものではない。

客観は、自己意識・個別性の排除ではない。一人一人がもつもの。個別性を破棄しない普遍性。

②知的探究における主体性と、知識そのものとの関係

客観的認識？科学的知識？→知識の理解の問題と、個人の満足の問題は不可分なのではないか？

…知識を得る時も情報を選ぶ「恣意性」＝主体性。そこに研究者と一般人の違いはあるか？

エピクロスの客観認識…皆がもつ感覚(自然との直接的関係)をもとにする。

→認識における、研究者・一般人の区別・優劣の妥当性が問われる。

個人の満足は、自然と人間、人間と人間の関係における知識を評価する基準として、

考え直す必要があるのではないか。

③現代の自然・社会の問題への対処のためには、自然の必然性、決定論的説明を克服した科学の創造が必要。

決定されない人間の主体性・自己意識を組み込んだ科学的認知枠のためのマルクス読解：

- ・ 偶然・必然を創出する自己意識
- ・ 人間の主体性の重視

参考文献

- ・荻原 理, 2007, 「学位論文におけるマルクスの方法の一側面」『文化』71(1.2): 156-133.
- ・工藤 秀明, 1995, 「『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』における自然—人間了解(上)—経済学史と自然認識—」『千葉大学 経済研究』10(3): 209-230.
- ・——, 1996, 「『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』における自然—人間了解(下)—経済学史と自然認識—」『千葉大学 経済研究』10(4): 165-192.
- ・黒沢 惟昭, 1979, 「マルクスの『学位論文』についての一考察—『具体的普遍』を中心に—」『人文学研究所報』(13): 52-60.
- ・城塚 登, 1970, 『若きマルクスの思想：社会主義思想の成立』勁草書房.
- ・正木 八郎, 1972, 「マルクスにおける実践概念の生成 学位論文と『準備ノート』」『思想』(580): 27-50. (再録：2001, 『情況 第三期』2(8): 161-187.)
- ・山中 隆次, 1969, 「マルクス思想の出立点—『学位論文』(1841年)を中心に」『経済理論』(108): 65-93.
- ・Althusser, Louis, 1988, *Filosofia y Marxismo: entrevista por Frenanda Navarro*, Mexico: Sigro Veintiuno Editores. (=2002, 山崎カヲル訳『不確定な唯物論のために【復刻新版】—哲学とマルクス主義についての対話—』大村書店.)
- ・Marx, Karl, [1841]1968, “Differentz der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie nebst einem Anhang,” Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Karl Marx - Friedrich Engels: Werke, Ergänzungsband erster Teil, Berlin: Dietz Verlag, 257-375.(=1975, 大内兵衛・細川嘉六監訳「学位論文『デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との差異』補遺を付す」『マルクス=エンゲルス全集 第40巻』大月書店, 185-294.)
- ・——, [1839]1968, “Hefte zur epikureischen, stoischen und skeptischen Philosophie,” Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Karl Marx - Friedrich Engels: Werke, Ergänzungsband erster Teil, Berlin: Dietz Verlag, 16-255.(=1975, 大内兵衛・細川嘉六監訳「エピクロス派、ストア派、および懐疑派の哲学へのノート」『マルクス=エンゲルス全集 第40巻』大月書店, 13-184.)
- ・エピクロス, 1959, 出隆・岩崎允胤訳『エピクロス—教説と手紙』岩波書店.
- ・Foster, John Bellamy, 2000, *Marx's Ecology: Materialism and Nature*, New York: Monthly Review Press. (=2004, 渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房.)
- ・ルクレーティウス, 1961, 樋口勝彦訳『物の本質について』岩波書店.

<マルクス学位論文の目次> (Marx[1841]1968=1975: 192)

斜体は欠落部分であり、注のみが残っている。

序言

第一部 デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との一般的な差異

I 論文の対象

II デモクリトスの自然学とエピクロスの自然学との関係にかんする諸判断

III デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学との同一性に関する諸困難

IV デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学とのあいだの一般的な原理的差異

V 結論

第二部 デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の個々の差異

I 原子の直線からの偏り

II 原子の諸性質

III アトモイ・アルカイ [不可分な諸根本原理] とアトマ・ストイケイア [不可分な諸構成要素]

IV 時間

V メテオーレ [天界・気象界の事象]

補遺 エピクロスの神学にたいするプルタルコスの論難の批判

I 人間の神にたいする関係

1 恐怖と彼岸的存在

2 礼拝と個人

3 摂理と貶された神

II 個人の不死

1 宗教的封建主義について。庶民の地獄(途中から欠落)

2 多くの人々の憧憬

3 選良たちの自負

序言 [新しい構想]